



保育

の

創意工夫

12

## 伝統を伝える

前原 寛

十二月に入ると年の瀬が近づいてきます。お正月を迎える準備の一つに餅つきがありますが、私のかかわっている保育園でも餅つきをします。石臼と杵きねを使う昔ながらのスタイルのものです。餅つきには保護者の参加も呼びかけ、仕事の都合のつく方々が何人か集まります。そして、つき手として園児のお祖父さんをお願いしています。

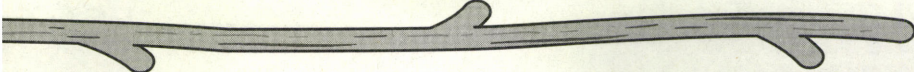
なぜお祖父さんかというと、残念ながら餅をつけるお父さんがほとんどないからです。お父さん方は力はあるのですが、的確なつき方ができません。最初にきちんと混ぜ、徐々に力を入れてつき、できあがり近づいたら力を抜いて全体を整えていくというように、強弱をつけることが餅つきには必要です。

最後の部分を当地方では「餅の顔を作る」と言い、できあがり具合に反映します。そこではつき方が強過ぎてても弱過ぎててもいけません。このような強弱のつけ方がお父さんたちにはできないのです。

そんなわけで、餅をつけるのはお祖父さんになります。孫のためならと張り切ってつく姿は、年齢を感じさせない達人さです。お父さんの中には、見よう見まねでそこそこつけるようになる人もいますが、なかなかお祖父さんたちのようにはいきません。「昔取った杵柄きねがら」とは言い得て妙だ、と納得してしまいます。

以前は、年末になるとごこの家でも餅つきをしたものです。しかし、餅作りの機械が普及すると、杵と臼を使った餅つきは急速に廃れていきました。それが、いまの園児の両親の世代です。その世代は餅つきの体験がほとんどありません。

世代間のギャップが言われる時、多くが親世代と子ども世代とのギャップを指しています。しかし、餅つきの例で言えば、園児と親の間にギャップはありません。ギャップがあるのは親世代と祖父母世代の間です。餅つきという伝統は、祖父母と親の間で切れてしまっているため、親と子どもとの間ではギャップがないのです。



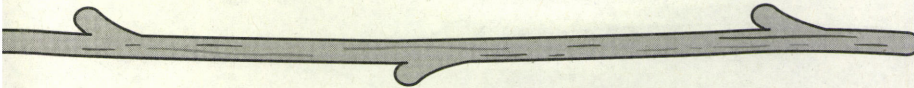
実際近所を見渡してみても、いまでも餅つきをしているのは保育園ぐらいいかありません。ですから、餅つきに来られたお祖父さん方は懐かしそうにされますが、お父さん方は物珍しい表情を浮かべています。

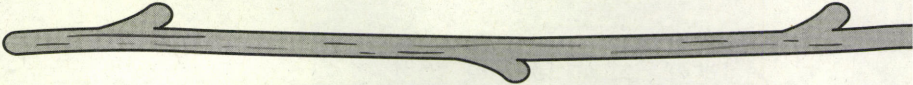
お正月に鏡餅を飾ったり、お雑煮を食べたりする家庭は多いのですが、餅がどのようになれるのかわからなくなっています。機械で作るだけでなく、店でも買えるようになっていきますから。餅つきという伝統は、いつの間にか保育園のような限られた場所しか伝承されなくなってしまうました。

改めて考えてみると、餅つきだけでなく、身近な生活の中から消えていった伝統や文化が数多くあることに気づかされます。

生活には文化があります。家庭には家庭の文化、地域には地域の文化があるように、保育園にも保育園文化があるといえるでしょう。それらが絡み合って子どもの生活に豊かさがもたらされています。

伝統や文化のすべてが残っていく必要はないかもしれませんが、その多くが消えつつあることは座視できないように思われます。餅つき一つとっても、生活に根づいていたのは数十年前までです。家庭で餅つきが行われていたころ、ついた餅をちぎって丸くこねることは、子どもの役割でしたし楽しみの一つでした。子どもの発達に直接役立つとはいえないかもしれませんが、生活に潤い





や奥行きを与えてくれるものではありません。

消えつつあるのは、餅つきのような生活感のあるものだけではありません。子どもの遊びも同様です。正月遊びには、羽根つき、コマ回し、カルタなどたくさんあります。子どもの遊びから季節感を感じ取ることも、かつては普通でした。現在正月遊びが家庭や地域でどれほどなされているでしょうか。お正月が来てもいつもと変わらぬ過ごし方をしている子どもたちにとって、季節感は無縁のものであるように感じられてなりません。

このような状況を嘆いていても、現実はなかなか変わりません。しかし、伝統や文化を生活に位置づける工夫をすることは、保育の中で可能なことです。また、少しの工夫を凝らすことで子どもの生活に潤いをもたらすことは、保育者の重要な役割でもあります。

「もついくつ寝るとお正月」という言葉通り、十二月はお正月を待ちわびる時期です。餅つきはその気持ちを表現してくれます。そして、年が明けると、当園では、羽子板、コマなどが環境構成の一部として現れます。羽根をつき、コマを回す子どもたちの姿が、園生活の風景を彩る季節を迎えるのです。

(鹿児島国際大学准教授・二元安良保育園園長)

\*この連載は今回で終了いたします。